

平和を繋いでゆくために

広島生まれのユダヤ系アメリカ文学者の提言

新田玲子

1. はじめに

第二次世界後、平和国家となることを誓った日本は、国際問題を武力に頼ることなく解決する努力を続けてきました。70年にわたつてこの姿勢を堅持してきたのは、先の大戦における先人たちの大きな犠牲から、二度と戦争をしてはならないという強い決意があればこそだったのではないのでしょうか。

しかし戦争の記憶が遠きつつある昨今、安全保障制度や平和憲法の見直しがかかんに取り沙汰されています。見

直すこと、それ自体を、頭ごなしに否定するつもりはありませんが、現行の見直しには、これまで日本が大切に守ってきた平和国家の姿勢を揺るがしかねない危うさが見受けられます。

また、アメリカの勢力が衰えるなか、アメリカは日本が自ら国防を強化することを主張し、アメリカがこれまで日本周辺で展開してきた軍事活動を日本が肩代わりするよう、強く求めています。独立国家として、自力で国防を計ることは不可欠ですが、日本には日本の外交方針があつてしかるべきで、アメ

リカの東アジアにおける防衛政策を引き継ぐことは、むしろ日本の国益を損ないかねません。

アメリカは第二次世界後、世界政治の安定のためにと、少なからぬ武力を行使してきました。1950～1953年の朝鮮戦争、1960～1975年のベトナム戦争、1980～1998年のイラン・イラク戦争、1999～1999年の湾岸戦争、そして2001年9月11日アメリカ同時多発テロ以降の、テロとの戦いと、10年と間を置かず戦争をしています。し

かも、枯葉剤の散布や劣化ウラン弾の使用、民間人の犠牲が出るのが明白な地域での空爆など、非人道的と非難される兵器や手段を繰り返し使用しています。日本が平和国家を標榜するのであれば、こうしたアメリカ的武力外交と一線を画さなければならぬことは明白です。

これまで私はアメリカ文学研究を通じて、第二次大戦後のアメリカ社会の実際と課題に向き合ってきました。アメリカ作家のなかには、次々と新たな戦争に巻き込まれる祖国に強く憤り、ア

アメリカの武力政策の根本的な誤りをいちはやく批判してきた人たちが少なくありません。特に、第二次大戦中の無差別爆撃や、ホロコーストと呼ばれるユダヤ民族絶滅計画を経験してきた作家たちは、軍事力に頼るアメリカに全体主義的な危険を嗅ぎ取ってさえいます。

そこで今回は、私の専門研究の内容や研究活動を題材に、次の世代に平和を繋いでゆくために本場に必要なものは何か、私たちは何に気を付け、何を心がけてゆくべきかを、もう一度考えてみたいと思います。

2. 伝えられないものを探して

過去に起きた悲劇を再び繰り返さないため、私たちにはその歴史を後世に伝えてゆく義務があります。こうした目的もあって、私はユダヤ系アメリカ文学に関する15コマの講義で、第二次世界後のユダヤ系アメリカ文学に大きな影響を与えたホロコーストを紹介する授業を、1コマ設けています。

この授業では、ドイツ軍が宣伝用に

撮影したユダヤ人の殺戮現場や、強制

収容所開放時に撮影された多数の放置遺体の写真も見せます。そのことについて、数年前に学生から、「文学の授業なのに、あんなおぞましい写真を見せる必要はないじゃあないですか」と、きつい抗議を受けたことがあります。授業の内容は文学作品の理解に必要不可欠な、最低限のものでしかありません。

それでも強い拒絶反応を引き起してしまっただけに、今の若い人たちは戦争から遠ざかっているのかと、愕然としました。今では、「この授業で見せる写真には非常に痛ましいものもあるので、目を背けても構いません。ただ、現実の写真が示すよりも何千倍、何万倍もひどかったことは、理解しておいてください」と、前置きすることになっています。

実際、ホロコーストについて90分の授業で示せる内容など、非常に限られています。ですから授業の中で語られたことをすべて理解してもらおうより、どれくらい多くのことが語られていないか、そして語り得ないかを、想像してもらうの方が、はるかに重要なのです。

これは資料館や記念館の展示内容に

ついても言えることでしょう。

アウシュビッツIIビルケナウ強制収容所跡地では、若い世代に配慮してか、展示はかなり抑えたものになっていました。人体実験が行われていた場所は公開されていません。また、靴や靴、あるいは人毛とそれで織った織物のように、人を殺さずに得られたものが、再利用のために堆く積まれている様子は見られますが、人の皮膚で作ったランプや、人の油で作った石鹸のように、人を殺さずには作りえなかつたものは展示されていないのです。それでも限られた展示から当時の様子を思い描き、平和の大切さや、平和を守るためにどうしたらよいか、訪問者に少しでもよく考えてもらえるようにと、ガイドの方々は定期的に勉強会を開き、研鑽を重ねていくと聞きました。

ホロコーストに関する情報をできるだけ次の世代に残そうという意図で設立されたワシントンDCのホロコースト博物館には、膨大な資料が、現物、写真、DVD、証言など、様々な形で展示されています。しかしそうした努力にもかかわらず、私の友人のホロコース

ト生存者が、「所詮、資料館は資料館でしかない」と切り捨てるように、決して十分とはいえません。ここではまた、少しでもホロコースト犠牲者の心情に近づいてもらおうと、入館者ひとりひとりに犠牲者のパスポートを与え、その人になり代わって見学するように促します。けれどもこうした試みを、テーマパーク的だと非難する人も少なくないのです。

ホロコーストを生き延びた多数のユダヤ人が老後を送ってきたマイアミや、ユダヤ人の聖地エルサレムのように、ホロコーストの実態を克明に伝えるというよりも、むしろ後世のために史実を刻み、犠牲者を悼み、追悼を促すことで、ホロコーストの記憶を繋ごうとしているところもあります。したがって、記されている以上の史実を自ら学び、失われた多くの命の重さに思いをはせつつ、平和について自ら考えなければ、記念館を訪れる意味がありません。

日本にも、広島県福山市にホロコースト記念館があります。ここはアンネ・フランクとゆかりを持つキリスト教関係者の方々が営まれ、日本でもよく知

られている少女が巻き込まれた大きな悲劇を手がかりに、宗教や人種の境界を越えた平和な世界について考える場を提供しています。

この他にも、ヨーロッパ各地にホロコースト関連施設があります。こうした施設のどれも、それだけで悲劇の全体像を如実に、正確に伝えてはいません。けれどもどの資料館も記念館もそれぞれに工夫し、ホロコーストを知る「きっかけ」となることを、そしてホロコーストについてもっと考えてもらう「入り口」になることを、目指しています。従って、そうした善意の努力に応えるためにも、私たちはこれらの場所を積極的に訪れ、そこで伝えられていない、語られていないものを探し求めてゆく責務を、負っているのではないのでしょうか。

3. 痛みと悲しみを乗り越えて

昨今では、原爆が最初に投下された日時どころか、日本が最初の被爆国であることすら答えられない児童や生徒が増えていると、報じられています。こうした戦争を知らない世代に戦争の実

態を語り伝えることは、当然なされるべきではありません。

ですが同時に、原爆について精通しておいでの方配諸氏でも、真珠湾攻撃の日を記憶されていなかったり、ホロコーストの意味をご存じなかったりするとは、案外、話題になりません。人は自分が受けた痛みほどには、人が受けた痛みを感じ取れず、日本が他国に与えた被害や、まったく別の場所です起きた同様の出来事からは、ついつい目を背けがちです。しかし、戦争において自身や自国が受けた痛みや悲しみだけに目を向けていて、果たして本当に戦争の根本原因を解決できるのでしょうか。

被爆者として被爆の実態を伝え、非核を訴え続けた原爆詩人、栗原貞子は、「ヒロシマというとき」(1976)という詩に、悲惨な体験や辛さを語るだけでは不十分だと悟らされた自身の体験を、切ないまでの自戒をこめて唱っています。

〈ヒロシマ〉というとき

〈ああ ヒロシマ〉と

やさしくこたえてくれるだろうか

〈ヒロシマ〉といえば〈パール・ハーバー〉

〈ヒロシマ〉といえば〈南京虐殺〉

〈ヒロシマ〉といえば 女や子供を

壕のなかにとじこめ

ガソリンをかけて焼いたマニラの火刑

〈ヒロシマ〉といえば

血と炎のこだまが 返つて来るのだ

〈ヒロシマ〉といえば

〈ああ ヒロシマ〉とやさしくは

返つてこない

アジアの国々の死者たちや無告の民が

いつせいに犯されたものの怒りを

噴き出すのだ

〈ヒロシマ〉といえば

〈ああヒロシマ〉と

やさしくかえってくるためには

捨てた筈の武器を ほんとうに

捨てねばならない

異国の基地を撤去せねばならない

その日までヒロシマは

残酷と不信のいがい都市だ

私たちは潜在する放射能に

灼かれるバリアだ

私はかつてフロリダの大学から、広島生まれの日本人女性研究者の私にとつて、ユダヤ系アメリカ文学やホロコースト文学がどういう意味を持っているのか、講演して欲しいと依頼されたことがあります。

私が若かった頃はまだ、大学でも女性差別は当たり前で、私はそれに抗いつつ大学に職を得、研究者として立つてきました。そうしたなかでは、アメリカ文学の夢を追う力や、様々な逆境を生き抜いてきたユダヤ人の生きる知恵が、大きな支えになりました。またこの苦しい体験から、私は性だけでなく、人種や宗教、その他の様々な要因で異なる人々のあいだに起きる衝突に敏感になり、そうした犠牲者への悼みが、身の回りの被爆者へ、さらには、研究対象であるユダヤ系作家たちに大きな影響を与えたホロコーストの犠牲者へと、私の関心を広げてゆきました。

このような私の個人的体験と世界の歴史を踏まえ、私がこの講演でもっとも強調したかったのは、私がアメリカ文学研究をとおして探求してきた、未来により良い世界をもたらすための道

筋でした。けれども講演後、最初に手を挙げたホロコースト生存者の反論は、それ以前の問題を厳しく批判していました。

「ユダヤ人は何も誤ったことをしていなかったのに殺された。ヒロシマの被爆者たちは、日本が自らしかけた戦争の犠牲になっただけではないか。原爆の責任は日本にある。被爆者とホロコースト犠牲者を重ねて論じるのはおかしい」

アメリカでは今日でも、原爆は戦争終結のために必要だったと考える人が過半数を占めます。ですからこういった反論は想定内で、決して極端なものとはいえません。それでも私はやはり、ホロコーストが、人が人に対して行っているのではない行為だったように、核兵器もまた、人が人に対して使用してはならないものであることを、強く訴え続けてゆかなければならないと考えています。

幸いこの講演会にも私の意図を正確に受け止め、よくぞはるばるフロリダまで話をしに来てくれたと、暖かい言葉をかけてくださった若い方々がたくさんいらっしゃいました。これは講演の

大きな収穫だったと、私は自負しています。

ところで、アメリカのオウシュビッツ生存者協会会長を務め、1986年にノーベル平和賞を受賞したエリ・ヴイーゼルも、翌1987年の来日公演で、原爆とホロコーストについて私と同様の立場を表明しています。講演会は東京と大阪で開催されたのですが、ヴイーゼルはそれらに先立って広島での平和記念館を訪れ、サイン帳に、「私たちは記憶し続けるだろう。記憶し続けなければならぬ。なぜなら、記憶することのみ、私たちは皆、希望を抱き続けられるのだから」という言葉を残しています。そして直後の大阪公演では、冒頭、被爆地広島で受けた大きな衝撃に言及し、ホロコーストの犠牲者が数百万単位であったのに対し、原爆の犠牲者は数十万単位で比較にならないと言ふ人もいるが、ある大きさを超えた悲劇は比較されるべきではなく、決して起きてはならないという点で、共通の悲劇と見なされるべきであると断定しました。

ヴイーゼルは作家としても、加害者・

被害者の枠を超えた広い視点から作品を書いています。たとえば処女長編『夜』(1960)で、自身の強制収容所体験を語るなか、彼は強制収容所の極限状態では、父親の死に涙を流せなくなっていただけでなく、「これで自由になつた!」と、父親を思い煩う必要がなくなつたことに安堵する、自身の自己中心的な心と向き合っています。さらに第二作『夜明け』(1961)では、強制収容所で被害者だった青年が、イスラエルの独立運動では英国将校を殺害する加害者の立場に立たされて苦悩する姿を描き、被害者と加害者の立場が容易に代わりうる可能性や危うさを見つめています。

戦争に善悪の道理が通用せず、敵・味方の別すらないことを痛烈に皮肉つたのは、カート・ヴォネガットが自身の戦争体験をもとに書き上げた『スローターハウス5(ファイブ)』(1969)です。ドイツ系アメリカ人のヴォネガットは、第二次世界ではアメリカ兵として祖先の出身地ドイツを敵に回し、バトルの戦いでドイツ軍の捕虜となつてドレスデンに送られます。そこで彼は、

当時捕虜収容所として使用されていた屠殺場(スローターハウス) 第5号棟に収監され、1945年2月、連合軍によるドレスデン大空襲に遭遇します。この空襲は、連合軍の勝利が確実なものとなつた時期での無差別殺戮として、連合軍側からも強い批判が出ているのです。しかもヴォネガットはこの味方の空襲で命の危機に晒されただけではありません。彼はドイツが誇る文化都市と多数の民間人が焼き尽くされる惨状を、目の当たりにしたのです。

ドレスデン空襲がヴォネガットにと



つて、敵・味方の別も善悪正邪も越えた不条理なものであったように、戦争に道理が通じないのであれば、戦争被害者の痛みや悲しみをいくら訴えても、戦いに走る人々の心を翻すことはとうていできません。だからこそ、未来の平和に向けた確実な一歩を築くためには、戦争被害者としての痛みや悲しみを乗り越え、戦争を引き起こす根本原因を、すなわち、多くの苦しみをもちらし、決して誰もが進んで望むはずがない戦いに、人々が駆り立てられてしまう要因を、敵・味方の立場を越え、あらゆる側から広く、深く、探求してゆく努力が必要なのではないでしょうか。

4 第二次大戦以後のアメリカ反戦文学に学ぶ

戦争はいつの時代も、愚かで悲惨なものでした。ですから第一次大戦に参加したアーネスト・ヘミングウェイも、処女長編『日はまた昇る』（1926）で、戦争がもたらした深い心の傷を題材にしています。また『武器よさらば』（1929）では、主人公ヘンリーは

混沌とした無意味な戦争に、一方的な決別を告げさせします。しかしヘミングウェイの主人公たちは一様に、死を前にした緊張感や極限状態に生の充実感を見出すため、愚かな戦いの場もヒロイックな行動を生み出す特別な舞台となってしまう。

この矛盾にいち早く気づいたのが、第二次大戦でノルマンディー上陸作戦に続く一連の激戦に参戦したJ・D・サルインジャーでした。彼は戦地に向かう直前に書き上げた「最後の賜暇の最後の日」（1944）で、出征直前の若い兵士ベープに、「今度の戦争にすでに行つてきた者も、これから行く者も、この戦争が終わつたら最後、口をびつたり閉じるつてことが、ともかく、もう二度とそのことを口にしないつていうのが、道義的義務だと思ふな」と言わせ、戦争を語ることに、それ自体が戦争を誘発する危険をはらんでいると、警鐘を鳴らします。

サルインジャーが指摘した危険は、物語における「語り」の機能が活発に議論される第二次大戦以降、強く意識されてゆくものです。その結果、たとえば、

イタリア戦線においてB・25の爆撃手だったジョーゼフ・ヘラーは、その体験を題材にした反戦作品『キャッチ22』（1961）で、主人公ヨッサリアンを、アンチヒーローと呼ばれる、英雄的資質を完全に欠いた、無力で滑稽な人物に仕立て上げます。

ヨッサリアンは任務飛行中の衝撃的体験のため怖じ気づき、狂気を理由に地上勤務に就けてもらおうと軍医に掛け合います。ところが軍医はそれを一蹴するのです。というのも、弾が飛んでくるところに出かけるのが怖いのは当たり前で、正気の証拠だから飛行免除は出せない。一方、そんなところに平気で飛んで行ける者は気が狂っているので、飛行免除は出せるが、免除には申請が必要で、申請した途端、その行為によつてその者の正気が証明されてしま

い、飛行任務の免除に相当しなくなるというのです。結局、ヨッサリアンはどうやつても死地に赴かざるをえない状況に陥ります。ヘラーはそうした行き詰まり状態を「キャッチ22」（落とし穴、第22番）と呼び、ヨッサリアンをその窮状に追いやる状況をブラックユーモア

で揶揄します。その結果この作品は、「キャッチ22」に捕らわれた者の無力さや、落とし穴を作り出す戦争の残酷さ、非情さを強調しても、読者を戦いに惹きつけることはありません。

前述した『スローターハウス5』でも、ヴォネガットは自身の戦争体験をもとに「反戦作品」を書くことの難しさをよく理解し、作品の冒頭で、「誓つて、フランク・シナトラやジョン・ウエインが演じるような役割がないものにする」と述べます。事実、彼は作中で語られる物語の主人公、ビリー・ピルグリムを、「敵を傷付けることもできなければ、味方を助けることもできない」、従軍牧師の助手という、典型的なアンチヒーローにしています。

この作品はまた、SF的要素を用い、戦争が引き起こしたビリーの内面の混乱を見事に描き出します。たとえば、戦争中の出来事はトラウマとなつてビリーを襲いますが、それを直視できない彼は、自分自身の意志とは無関係に時空を往来する異次元旅行者だと言いつののです。彼はまた、トラルファマドール星人の、「あらゆる瞬間は、過去、



エルサレム、ヤド・ヴァシエム内部



パリにもホロコースト記念館があります



マイアミホロコースト記念館

現在、未来を問わず、常に存在してきているのだし、常に存在し続ける」という四次元思考を信じています。それは「すばらしい嘘」であつても、空襲で焼き尽くされた街や人々が、他の時間帯には存在し続けることを保証し、悲劇的体験の衝撃を和らげてくれるからです。こうして、この作品のSF的要素は、ビリーが受け入れられない戦争のむごさを間接的に、しかし明確に示唆する一方、戦争への憧れを掻き立てることなく、戦争という重苦しい題材を受け止めやすいものに変え、読者を作

品に惹きつける役割も果たすのです。もちろん、第二次大戦後の戦争を題材にした作品がすべて、こうした良質の反戦作品というわけでも、主人公がすべてアンチヒーローというわけでもありません。特にハリウッド映画に代表される通俗作品では、激戦のさなか、銃を雄々しく撃ちまくる勇ましいヒーローが数多く登場します。ここでは悲劇的な死さえも、心掻き立てる場面となります。ですがそれはそれで、日本のアニメや時代劇に通底する効果を備えているといってもよいでしょう。

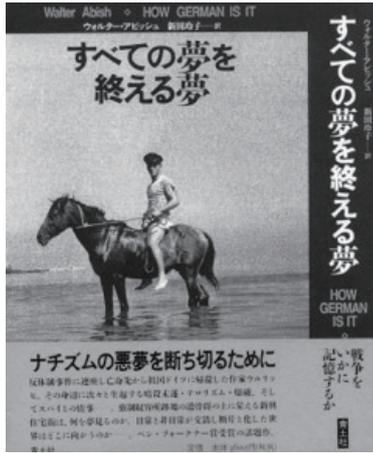
たとえば、ウルトラマン、仮面ライダー、ガンダムといったヒーローの活躍や、時代劇の剣客たちの素晴らしい剣さばきも、突き詰めれば戦争ヒーローと変わらない、力に頼った戦いです。それでもこうした娯楽作品のヒーローを、戦争を引き起こす危険があるという理由で斥ける視聴者はほとんどいないでしょう。というのも、こうした作品には、なかなかきつぱり正義が貫けない現実の憂さを晴らすような、カタルシス効果も含まれているからです。実際、微妙な危険にことさら目くらまらを立て、表現を一律に規制するなら、むしろそれこそが表現の自由を損ない、思考を統制する、形を変えた暴力になりかねません。

大切なことは、どういう作品が良い反戦作品か、どういうヒーローが良い

ヒーローか、ということではありません。様々な作品の隠された効果や意義を十分に認識し、そのうえで現実と虚構に明確な一線を引きながら、「力の戦い」の本質を考察し、「虚構のカタルシス」を十分に堪能するのびやかな感性と想像力とを涵養する。そのことこそが重要なのではないのでしょうか。そしてそのような研ぎ澄まされた思考力や鋭い感受性を養うためにこそ、第二次大戦後のアメリカ反戦文学のような、戦争について「語る」ことの危険にさえ敏感な優れた文学作品に、日頃からもつと親しんでもらいたいと願うのです。

5. 平和を未来へ引き継ぐために

私が日本に紹介してきたポストモダンユダヤ系アメリカ作家、ウォルター・アピツシュは、1931年、ウイーンに生まれ、1938年、ナチスのオーストリア併合に伴って起きたユダヤ人迫害を避けて祖国を脱出、イタリア、フランスを経由して、1940年、当時日本軍支配下にあった上海に逃げ延びました。その後、一家はイスラエルに渡



り、アビッシュは成人してのち、アメリカで作家活動を始め、1980年にペン・フォークナー賞を獲得した長編第二作、『すべての夢を終える夢』を発表します。

この作品の舞台は、作品が書かれた戦後33年ないし34年の、繁栄する平和なドイツで、作品には疑問文が多く用いられ、人々が日々の平和な暮らしで当然と見なしている様々な事柄に、ナチス時代の過ちを繰り返す危険が潜んでいないか問いかけます。疑問文は決して特定の解釈を押しつけることはありません。そのため、未来の平和を確実なものにするために何に注意し、何を為してゆかなければならないか、作品は読者ひとり一人に思考を促しつつ、判断を読者の自発的模索に委ねます。

言い換えるなら、この作品は過去の戦争に言及しながら未来の平和について考えさせる、未来に開かれた作品であり、かつ、読者の多様な思考を容認するリベラルでヒューマニスティックな、読者に開かれた作品です。そしてこの作品のこうした特徴こそ、ホロコーストを避けるためにアメリカで困難な亡命生活を余儀なくされたテオドル・アドルノや、青年期から壮年期にヒトラー時代を経験したエマニュエル・レヴィナスら、第二次世界後のユダヤ系思想家によって育まれ、ジャック・デリダらのポストモダンヒューマニストの哲学者に受け継がれてゆく姿勢なのです。

たとえばアドルノは、それまでの西洋哲学が探し求めてきた、全体を統一する理念の、様々なものをひとくくりにする「レツテルを貼ろうとする精神傾向」には、ファシズムを培養してきた反ユダヤ主義的精神傾向と一脈通じるものがある」と、その危険性を指摘しました。そして、自分と異なり、理解できない「他者」を排除することなく、同一の座標に並べて眺めることの重要性を唱えました。同様の内容を

レヴィナスは「顔」を用いて説明し、我々は「われわれの世界を超えたところから到来し、(中略)われわれの世界の尺度で計ることはできない」他者の「顔」の呼びかけに応じる責任があると主張し、この他者の「他者性」を受け入れることこそ、平和への道筋であると考えました。

ホロコーストの影響を受けたこうした作家や思想家に共通して言えることは、未来において人が人を傷付ける悲劇を繰り返さないためには、自分と異なる「他者」との違いに敬意を表しつつ、「他者」を限りなく受け入れてゆくヒューマニスティックな努力が欠かせない、という主張です。

を力で押さえこむのではなく、異なる思考や要求を、己の主張と対等な立場に置いて話し合う姿勢こそが肝要といえます。

そしてまさにこの姿勢こそ、過去の反省に立ち、未来に向かって努力することを旨とした、第二次大戦後の日本が70年間、平和外交の根幹となしてきたものだったはずで、それ故、独立国家の名にふさわしい国防を目指すのであれば、日本はアメリカ式国防ときっぱり一線を画し、アメリカの基地や軍勢力を肩代わりしたり、アメリカの軍事活動を支えるような安全保障法案を作り上げたりするのではなく、日本独自の平和外交に一層邁進すべきではないでしょうか。 ■

たたとえばアドルノは、それまでの西洋哲学が探し求めてきた、全体を統一する理念の、様々なものをひとくくりにする「レツテルを貼ろうとする精神傾向」には、ファシズムを培養してき

た反ユダヤ主義的精神傾向と一脈通じるものがある」と、その危険性を指摘しました。そして、自分と異なり、理解できない「他者」を排除することなく、同一の座標に並べて眺めることの重要性を唱えました。同様の内容を

マーティン・ジェイ『アドルノ』本田元村岡晋一訳、岩波書店、1992年、51頁
 港道隆『レヴィナス 法—外な思想』講談社、1997年、168頁